

各農業改良普及センター所長様
各農業協同組合長（営農担当者）様
各病虫害調査協力員様
各農業関係機関長・団体長様

京都府病虫害防除所長
（公印省略）

病虫害発生予察情報について

下記のとおり発表しましたので送付します。

病虫害発生予報第2号（4月）

予報の概要

作物名	病虫害名	予想発生量 < 平年比(前年比) >
果樹	カキクダアザミウマ（カキ） 黒斑病（ナシ）	並（並） 並（やや多）
チャ	もち病 チャノホソガ カンザワハダニ	並（並） 山城 <u>多</u> （やや多） 丹波 <u>やや多</u> （やや多） 山城 並（やや少） 丹波 <u>やや多</u> （やや多）
野菜	コナガ（キャベツ、ハクサイ等） 菌核病（キャベツ）	並（やや少） <u>多</u> （多）

平年とは過去10年の平均である。

用語の定義

1 半旬のとり方

	第1半旬	第2半旬	第3半旬	第4半旬	第5半旬	第6半旬
各月の	1～5	6～10	11～15	16～20	21～25	26～最終
	日	日	日	日	日	日

2 発生量 - - - 病害虫の発生程度と広がりの両面を加味したものをいう。

3 平年値 - - - 原則として過去10か年の平均とする。
データが10年に満たない場合は例年値とする。

4 平年値との比較

1) 時期

平年並	平年値を中心として前後2日以内
やや早い	平年値より3～5日早い
やや遅い	平年値より3～5日遅い
早い	平年値より6日以上早い
遅い	平年値より6日以上遅い

2) 量(発生量、発生面積等)

平年並	平年値並の発生で10年間に4回は発生する程度の普通の量
やや多い	「平年並」より発生が多く、10年間に2回程度の頻度で発生する量
やや少ない	「平年並」より発生が少なく、10年間に2回程度の頻度で発生する量
多い	「やや多い」より多く、10年間に1回程度しか発生しない量
少ない	「やや少ない」より少なく、10年間に1回程度しか発生しない量

- 農薬の使用にあたっては使用基準を遵守すること -

近畿地方 1 か月予報

(3 月 2 2 日から 4 月 2 1 日までの天候見通し)

平成 2 0 年 3 月 2 1 日

大阪管区气象台発表

< 予想される向こう 1 か月の天候 >

向こう 1 か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わるでしょう。平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

向こう 1 か月の気温は平年並または高い確率ともに 4 0 % です。週別の気温は、1 週目は高い確率 5 0 % です。

< 向こう 1 か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%) >

	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気 温	2 0	4 0	4 0
降 水 量	4 0	3 0	3 0
日 照 時 間	3 0	3 0	4 0

注意

大阪管区气象台から発表される天候の 1 か月予報の表現が、平成 1 8 年 9 月 2 5 日以降変わりました。

これまで病害虫発生予察の一つ根拠としていた天候の 1 か月予報の表現と整合性をとるため、病害虫防除所では上記の天候の 1 か月予報の表現を「**向こう 1 か月の気温は平年並または高く、降水量、日照時間は平年並と予想されている。**」としました。

お知らせ

残留農薬基準等のポジティブリスト制度導入に伴う農薬適正使用の徹底について

平成18年5月29日より食品衛生法に基づくポジティブリスト制度が導入され、いままで残留基準値が定められていなかった農薬成分と農作物の組み合わせにも、新たに国際基準等を参考として暫定的な基準値が設定されるとともに、参考となる基準がない場合には一律基準（人の健康を損なうおそれのない量；0.01ppm）が適用され、基準値を超えて農薬が残留する食品（農産物等）の流通が禁止となりました。

このため、農薬の適正使用はもちろんのこと、周りのほ場の作物へ農薬が飛散（ドリフト）しないように十分注意してください。

また、水田において農薬を使用するときは農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項等を確認するとともに、止水期間を1週間程度とし、止水期間の農薬の流出を防止するために必要な水管理や畦畔整備等の措置を講じるよう努めてください。

予報本文

イネ

1 苗立枯病

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 病原菌の多くは土壌生息菌である。山土や水田土壌等を使用する場合は、床土のpHを4.5～5.0に調整し、は種前に粉剤の床土混和を必ず行う。
- (2) 低温多湿に経過するとピシウム属菌、高温多湿（特に出芽時）ではリゾープス属菌による苗立枯病が発生しやすくなる。育苗中の温度管理に注意し、出芽後は10～30の範囲で管理する。特に、トンネル育苗では外気の影響を受けやすいので、日中の高温や夜間の低温に注意する。
- (3) 出芽後はこまめに観察し、カビを認めれば直ちに薬剤防除する。菌の種類により効果のある薬剤が異なるので注意する。

2 もみ枯細菌病（苗腐敗症）

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 病原細菌は種子伝染するため、塩水選ともみ枯細菌病に登録のある農薬を用いた種子消毒を必ず実施する。
- (2) 出芽時の温度は30を基準とする。ただし、加温しない育苗は10～30の範囲で管理する。
- (3) 発病苗を植付けると本田で腐敗し、欠株となるので、発病した苗箱の苗は使用せず処分する。

3 苗いもち

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 種子伝染がいもち病の主要な伝染経路の一つであるため、健全な種子を用い、塩水選と種子消毒を必ず行う。
- (2) 前年の稲わら、もみがらは有力な伝染源となるので、育苗場所の周辺には置かないようにする。

種子消毒について

・平成16、17年に**MBI-D剤耐性いもち病菌**が一部地域で確認された。耐性菌の頻度低下と拡大防止のため、健全な種子を用い塩水選と**種子消毒**を必ず行う。

MBI-D剤：カルプロパミド（商品名：ウィンなど）、ジクロシメット（商品名：デラウスなど）、フェノキサニル（商品名：アチーブなど）

・温湯消毒を行う場合は必ず乾籾を用い、処理温度と時間を厳守するとともに、処理後は速やかに水で冷却し、直ぐに浸種・催芽を行う。また各機種の使用上の注意事項を遵守する。

ムギ

1 赤かび病

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 開花期から2週間以内に雨が多いと発病が多くなる。開花は出穂期からおよそ1週間後である。防除最適期は開花初期～開花最盛期であり、防除を徹底する。
- (2) 六条大麦は特に発生しやすい。
- (3) ほ場の水はけが悪いと生育・出穂が不揃いとなり、防除効果が低下しやすいので、出穂前にほ場の排水を良くする。
- (4) 赤かび病菌は人畜に作用性の強いカビ毒をつくる。

果樹

1 カキクダアザミウマ(カキ)

予報内容 発生量：平年並(前年並)

予報の根拠

- (1) 前年秋期の被害果率は平年並。
- (2) 向こう1か月の気温は平年並または高く(+)、降水量、日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 4月下旬頃に越冬場所から新芽に移って、展開後2～3日以内の若葉に寄生する。
- (2) 越冬後の成虫は、展葉5～6枚の頃に若葉に飛来が多くなり、この頃が防除適期となる。産卵により葉が巻き始めると防除効果が低下する。

2 黒斑病(ナシ)

予報内容 発生量：平年並(前年比やや多い)

予報の根拠

- (1) 越冬罹病枝率は平年並。
- (2) 向こう1か月の気温は平年並または高く(+)、降水量、日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 気温が高く、降雨日数が多い年は多発しやすい。
- (2) 受粉直後から新芽伸長期にかけての防除が重要である。

チャ

1 もち病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

防除時期：萌芽～1葉期

予報の根拠

- (1) 前年秋期の発生量は平年並。
- (2) 向こう1か月の気温は平年並または高く、降水量、日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 越冬芽に付着した孢子が3月下旬頃から発芽し始め、新芽の生育につれて若葉に感染する。
- (2) 雨が多く、じめじめした天候が続くと多発する。
- (3) 昨年、秋期に多発した園では注意する。

2 チャノホソガ

予報内容 発生量：山城 平年比多い（前年比やや多い）

丹波 平年比やや多い（前年比やや多い）

防除時期：2葉期

予報の根拠

- (1) 前年秋期の発生量は、山城で平年比多く（+）、丹波で平年比やや多い（+）。
- (2) 向こう1か月の気温は平年並または高く、降水量、日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 蛹で越冬後、4月上旬～5月上旬に成虫が羽化し、新芽に産卵する。気温が高いと発生が早くなる。
- (2) ふ化した幼虫は若葉裏面の表皮下に食入し、成長すると葉を三角形に巻く。
- (3) 秋整枝をしなかった園や自然仕立て園では発生しやすい。
- (4) 巻葉内に堆積した虫糞により製茶品質が低下するので、摘採近くになって巻葉を生じた場合は速やかに摘採する。なお、摘採が遅くなる園では、幼虫の発生に十分注意する。

3 カンザワハダニ

予報内容 発生量：山城 平年並（前年比やや少ない）

丹波 平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 3月下旬の調査では、発生量は山城で平年比やや少なく（-）、丹波で平年並。
- (2) 向こう1か月の気温は平年並または高く（+）、降水量、日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 気温が上昇し、暖かい晴れた日が続くと、急速に増殖する。
- (2) この時期の防除は重要であるが、必ず萌芽前に行う。

4 ミカントゲコナジラミ

ミカントゲコナジラミは、平成 16 年 8 月に京都府で、国内で初めてチャへの寄生が確認され（平成 17 年 6 月 14 日付け京都府発生予察特殊報）、分布の拡大が懸念されている。本年 3 月の巡回調査では、山城ですすが認められたほ場もあった。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 成虫の発生時期

年に 4 回発生し、越冬世代は 4 月下旬～5 月中旬に発生すると予測される。

(2) 対策

農薬による防除適期は若齢幼虫期であり、1 回目の防除適期は 6 月頃（越冬世代成虫の飛翔が落ちついた頃）と予測されるので、この時期に防除する。成虫発生期の散布では密度抑制効果はほとんど期待できない。

(3) 登録のある薬剤

- ・ハチハチ乳剤（1,000 倍、摘採 14 日前まで / 1 回）
- ・アブロード水和剤（1,000 倍、摘採 14 日前まで / 2 回以内）
- ・アブロードエースフロアブル（1,000 倍、摘採 14 日前まで / 1 回）

野菜

1 コナガ（キャベツ、ハクサイ等）

予報内容 発生量：平年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 3 月下旬の調査では、発生を認めなかった（平年並）。
- (2) 向こう 1 か月の気温は平年並または高く（+）、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 雨が多いと発生が抑制される傾向がある。

2 菌核病（キャベツ）

予報内容 発生量：平年比多い（前年比多い）

予報の根拠

- (1) 3 月下旬の調査では、発生量は平年比多い（+）。
- (2) 向こう 1 か月の気温は平年並または高く、降水量、日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 春に発生が多く、適温は20前後、曇雨天が続いた時に発生しやすくなる。
- (2) 発生終期に菌核が形成され土中に落ち、次の伝染源となる。菌核は土壌中で2～3年間生き残る。

3 トマト黄化葉巻病

トマト黄化葉巻ウイルス (TYLCV: Tomato Yellow Leaf Curl Virus) の感染により引き起こされる病気である。平成17年12月に府南部の抑制栽培トマトで発生が確認された。

最近では、平成20年1月に発生を確認しており、今後とも注意が必要である。

発生生態及び防除上注意すべき事項

トマト黄化葉巻病の発生・拡大を防ぐためには、「トマト黄化葉巻ウイルスの伝染環を絶つ」ことが重要である。そのためには、防虫ネットや黄色粘着ロール及び農薬等を組み合わせた「総合的害虫管理」が有効となる。

防除対策の基本事項

- ・施設内にウイルス・コナジラミを「入れない」。
 - ・施設内・施設周辺のコナジラミを「増やさない」。
 - ・施設内からコナジラミを施設外に「出さない」。
- (1) タバココナジラミ類を介して伝染するので、発生状況に注意する。
 - (2) 苗を購入する時は、コナジラミ類が寄生していないか、先端部の葉が黄色くなって表側が巻いていないかを確認し、健全な苗を植え付ける。
 - (3) 発病した株については抜き取り、袋に入れて密封して枯死させるか土中に埋めて処分する。
 - (4) 野良生えトマトも重要な伝染源となるので、自生したトマトは除去する。
 - (5) 開口部 (サイド、出入口、天窓等) すべてを0.4mm目合いの防虫ネットで被覆する。出入口は2重に被覆する。
 - (6) 黄色粘着ロールをハウス周囲及び開口部に展張する。
 - (7) 近紫外線カットフィルムを使用する。
 - (8) コナジラミ類に対する発生初期の防除を徹底する。薬剤で防除する場合は、葉裏までていねいに散布する。
 - (9) 同一系統の薬剤の連用は薬剤感受性の低下につながるため、ローテーション防除を実施する。
 - (10) 天敵や微生物農薬を有効利用する。
 - (11) ラノーテープを使用する場合は、定植直後から使用する。
 - (12) 黄色粘着板を吊り下げて、コナジラミ類の発生を把握する。

4 タバココナジラミ類

タバココナジラミ類は世界中に分布し、多くのバイオタイプ (形態的な区別が難しく、遺伝的、生物学的に異なる系統) が存在する。国内では在来系統 (バイオタ

イプJpL)、バイオタイプB(従来のシルバーリーフコナジラミ)、バイオタイプQが確認されている。

農業総合研究所と病害虫防除所が行ったコナジラミ類分布調査では、タバココナジラミ類は京都府全域に発生していることが判った。平成17年にはバイオタイプQが府内で初めて山城で確認され、平成18年には綾部市まで発生地域が拡大した。

タバココナジラミ類は、夏以降発生が増加し、また、薬剤感受性が低く難防除害虫といわれていることから、総合的な防除対策(トマト黄化葉巻病参照のこと)が必要である。

5 野菜苗の害虫類(ハモグリバエ類、アザミウマ類、コナジラミ類)

購入苗の使用に当たっては、害虫が寄生していないことを確認する。なお、ハモグリバエ類、アザミウマ類、コナジラミ類など、微小なものが多いので注意する。

病害虫防除については、病害虫防除所・最寄りの農業改良普及センター又は農協にご相談ください。

詳しい農業情報は、農林水産省ホームページの「農業コナ」をご覧ください。

ホームページアドレス <http://www.maff.go.jp/nouyaku/>

農業改良普及センター 電話番号一覧

・ 京都乙訓	農業改良普及センター	0 7 5 - 3 1 5 - 2 9 0 6
・ 山 城 北	農業改良普及センター	0 7 7 4 - 6 2 - 8 6 8 6
・ 山 城 南	農業改良普及センター	0 7 7 4 - 7 2 - 0 2 3 7
・ 南 丹	農業改良普及センター	0 7 7 1 - 6 2 - 0 6 6 5
・ 中 丹 東	農業改良普及センター	0 7 7 3 - 4 2 - 2 2 5 5
・ 中 丹 西	農業改良普及センター	0 7 7 3 - 2 2 - 4 9 0 1
・ 丹 後	農業改良普及センター	0 7 7 2 - 6 2 - 4 3 0 8

農作物病虫害情報サ - ビス

・ テレホンサービス

0 7 7 1 - 2 3 - 6 4 4 2

・ ホームページアドレス

<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/>

京都府病虫害防除所

〒621 - 0806 京都府亀岡市余部町和久成9

TEL 0771-23-9512

FAX 0771-23-6539